アーネスト・ヘミングウェイにおける女性達 (1)

—— "bitch" と呼ばれた女達 ——

丸　田　明　生

I

「キリマンジャロの雪」("The Snows of Kilimanjaro") は「フランシス・マコーマーの短い幸せな生涯」と共に1926年コスモポリタン (*Cosmopolitan*) 誌上に発表されたばかりでなく，その内容もアフリカのサファリを題材とした双子とも言える物語である。そして更に内容的にみると男性の主要登場人物の扱われ方には両者に違いが見られるけれども，女性の主要登場人物の扱いには共通点が厳然として存在することはすべての読者の実感するところである。そしてその共通なものとは，その二つの作品に登場する男性のキャラクターによって彼女等に浴びせられる「悪女」("bitch")という名称である。本論はこの名称が果たして妥当なものであるか否かを論考することから始めたいと思う。先ず「キリマンジャロの雪」のヘレン (Helen) を考えることとする。

Roger Whillow はその著 *Cassandra's Daughters*[1] の中で Edmond Wilson や Philip Young や Carlos Baker や Leslie Fiedler などの著名な批評家達が，すべてその男性主人公達の "bitch" という罵声をそのまま正しいものとする前提のもとにこの作品を解釈していること[1] に反論し，「この物語の中にあるものは，弱く，臆病で，不正実で且つ残酷であり ——

そして長い間そのようであった男ハリーと強く，思慮深く，且つ深い愛情をもった女」[2] である，としている。この解釈は筆者の見解の殆どを代弁すると思われるのでここに引用することとしたが，論証については私自身の方法によって行うこととする。

先ず作品の冒頭近くにあらわれるハリーとヘレンの会話に注目しよう。アフリカのキャンプ地でハリーは壊疽のために簡易ベッドに横たわっている。

「……わたしは何もしてあげられないので，とても落着かないだけのことよ。飛行機がくるまでできるだけ楽になれたらと思っているの」

「それとも飛行機が来ないまではだ」

「わたしにできることをどうか言ってちょうだい。何かわたしにできることがある筈だわ」

「脚をもぎ取ることもできるね。そうすれば痛みはなくなるかも知れん。それも怪しいものだが。又俺を射つこともできるさ。君は今では立派な腕前だ。俺が教えたんじゃなかったかなあ」

「どうかそんな言い方はなさらないで。本でも読んであげられません？」

「何を読むんだい？」

「書物鞄の中のまだ私達が読んでいないものなら何でも」

「俺はそんなの聞くことはできないよ。話すのが一番楽さ。喧嘩でもしていりゃ時間がたつさ」

(. . . 'It's that I've gotten so very nervous not being able to do anything. I think we might make it as easy as we can until the plane comes.

'Or until the plane doesn't come.'

'Please tell me what I can do. There must be something I can do.'

'You can take the leg off and that might stop it, though I doubt it. Or you can shoot me. You're a good shot now. I

taught you to shoot, didn't I?'

'Read what?'

'Anything in the book bag that we haven't read.'

'I can't listen to it, he said. 'Talking is the easiest. We quarrel and that makes the time pass.' _pp. 54 - 55)[3)]

「思いやりがあって」「愛情こまやかな」ヘレンに対して，ハリーの言葉は「残酷」で相手の感情を執拗に傷つけていく。この場面に続いて次の会話はどうだろう。酒飲みのハリー——大酒を飲んだ（drinking so much _p. 60）というハリーの独白がある——は，彼の傷のためによくないことは明らかにも拘らず，

「一杯はどうだろう？」

「お酒はあなたにはよくないことになっているのよ。アルコールはいけないとブラックの本にかいてあったわ。飲んではいけないわ。」

「モロ！」彼は叫んだ。

「はい，旦那さま」

「ウイスキー・ソーダを持ってきてくれ」

「はい，旦那さま」

「いけませんわ。それがやけをおこすということなのよ。あなたにはよくないと書いてあるわ。私もあなたによくないとわかっているわ」と彼女は云った。

「いや，俺にはいいんだ」と彼は云った。

('What about a drink?'

'It's supposed to be bad for you. It said in Black's to avoid all alcohol. You shouldn't drink.'

'Molo!' he shouted.

'Yes, Bwana.'

'Bring whisky-soda.'

'Yes, Bwana.'

'You shouldn't,' she said. 'That's what I mean by giving up. It says it's bad for you. I know it's bad for you.'

'No,' he said. 'It's good for me.' _pp. 54 - 55)

ここには酒の誘惑に抵抗できないハリーの「意志の弱さ」(weakness) がある。「殺し屋」("The Killers") の中で反応するニック (Nick) の「俺はこの町からでていくんだ」(I'm going to get out of this town, _p. 233) にみられる姿勢であり,「医師とその妻」("The Doctor and the Doctor's wife") その他のヘミングウェイの作品の多くに彷彿する「恐れ」(fear) や「障害物」(obstacle) からの逃亡に共通する感情とも考えられ, いわゆる「ヘミングウェー・ヒーロー」(Hemingway Hero) の本質的一貫性を示唆する。

ハリーはヘレンを「金持ちの悪女」(rich bitch _p. 60)と呼ぶ。そして自分が彼女の金のために, 又彼女の親切さや世話やきなどのためにその才能を破壊されるほど酒を飲み, 怠惰となり, 俗物根性や高慢や偏見の持主になったのではないかと考える。「そんなことはない。お前の才能はお前が破壊したのだ。お前が才能を使わないでおいたためにそうなったんだ……」(. . . Nonsense. He had destroyed his talent by not using it, . . . _p. 60) と自己の責任を認めているけれども相手にそれを押しつけたい気持ちがその言葉の端に見え隠れする。そして, ヘレンとの出合いの経緯が振りかえられる。

……彼が新しい女と恋に落ちると, 彼女は前の女よりいつも金持ちだということは不思議ではないか。しかし彼がもはや愛さなくなり, ただ愛している振りをしている時, 誰よりも金を持ち, どれだけあるかわからないほどの金を持ち, 夫と子供を持ったことがあり, 愛人もつくったこともあり, その愛人達に満足しなかった今のこの女が, 作家として, 一人の男として, そして道づれと

して，そして誇れるに足る所有物として深く彼を愛していた。彼女を全然愛していないで，愛していると嘘をついている時，彼が本当に愛していた時よりも彼女の金に対してそれ以上のものを報いることが出来るとは不思議なことだった」

(. . . It was strange, too, wasn't it, that when he fell in love with another woman, that woman should always have more money than the last one? But he no longer was in love, when he was only lying, as to this woman, now, who had the most money of all, who had all the money that was, who had had a husband and children, who had taken lovers and been dissatisfied with them, and who loved him dearly as a writer, as a man, as a companion and as a proud possession; it was strange that when he did not love her at all and was lying, that he should be able to give her more for her money than when he had really loved. _pp. 60 - 61)

ここにはハリー自身が云っている「高慢と偏見」が滲み出ている。ハリーが金をヘレンに負うていたことへの直接の言及はないが，それは暗示されていて，今自分が作家として有名になったことで彼女が十分その報酬を得ているのだ，といっていると読みとれる。しかし又同時にハリーはヘレンの美点を次々と列挙する。「彼女は食肉を少し得るために出かけていた。彼が獲物を見るのが好きなことを知っていたので，彼の視界内の平原の一地帯だけは邪魔しないようにいつも離れたところへ行っていた。彼女はいつも思慮深い，と彼は思った。彼女が知っていること，読んでいること，聞いてきたことについてはどんなことでもよく考えていた」(She had gone to kill a piece of meat and, knowing how he liked to watch the game, she had gone well away so she would not disturb this little pocket of the plain that he could see. She was always thoughtful, he thought. On anything she knew about, or had read, or that

she had ever heard._p. 59）もその一つである。

それに対しハリーは，「本当に君を愛しているんだよ。君もわかっている筈だ。君を愛するように外の人を愛したことは一度もないんだよ」（I love you, really. You know I love you. I've never loved anyone else the way I love you._pp. 58－59）といった後で，「いつもの嘘にはまっていた。それによってパンとバターをかせいだ嘘に」（He slipped into the familiar lie he made his bread and butter by..._p. 59）と謎めいた言葉を漏らすのである。

「それによってパンとバターをかせいだ」というのだから，作家ハリーの書くものが嘘による構築であるという意味に違いないが，しかしすべてが嘘である筈はない。フィクションの中に作家はやはり真実を語らざるを得ないのだ。この作品で云えばヘレンに以前夫があり子供があり，愛人があったという部分が「嘘」であり，――これは本論で次第に明らかにされていくであろう――ハリーがもはやヘレンを愛していない，と告白しているのが「真実」であり，この作品の結末の部分で，ハリーの息づかいが最早聞こえなくなり，ハイエナがテントの外でヘレンの目を醒まさせたのと同じ奇妙な声をたてた時，「彼女は自分の心臓の鼓動の響きにハイエナの声が聞こえなかった」（. . . she did not hear him for the beating of her heart... _p. 75）のは，ヘミングウェイによって書かれたヘレンの真実であろう。問題は愛していないのに愛していると嘘をつくハリーの「不誠実」さが次第に浮びあがってくる，ということである。

それでは何故ハリーはもはやヘレンを愛さなくなっていると云うのであろうか。その理由を探るためには，この作品と当時のヘミングウェイの伝記の両方にその手掛かりを求めなければならない。

「キリマンジャロの雪」には次の一節がある。ハリーはヘレンと結婚した経過を次のように述べる。

事は極めて簡単に始まっていた。彼女は彼の書くものを好み，彼が送っていた生活をいつもうらやましく思っていた。彼女は彼は自分がしたいと思う事を間違いなくやるように思った。彼女が彼を獲得し，遂に彼と恋に落ちた手順は，すべて彼女にとっては自分のために新しい生活を築き，彼の方は古くさい生活の中に残っているものを売り払うというまともな成り行きの一部であった。

彼は古い生活を生活の保障のために，又安楽な暮しのためにも売り払ったのだった。それを否定することはできなかった。その外に何があったというのだ。彼にはわからなかった。彼女は又とてもいい女だった。彼女は買ってくれといえばどんなものでも彼に買ってくれただろう。彼は他のどんな女よりも彼女とベッドに入りたいと思った。むしろ彼女とそうしたかった。何故なら彼女の方が金持ちであり，彼女がとても愉しい女であり，又鑑賞眼を持っていたからであり，又彼女が決して騒ぎ立てなどしないからであった。

(It had begun very simply. She liked what he wrote and she had always envied the life he led. She thought he did exactly what he wanted to. The steps by which she had acquired him and the way in which she had finally fallen in love with him were all part of a regular progression in which she had built herself a new life and he had traded away what remained of his old life.

He had traded it for security, for comfort too, there was no denying that, and for what else? He did not know. She would have brought him anything he wanted. He knew that. She was a damned nice woman too. He would as soon be in bed with her as anyone; rather with her, because she was richer, because she was very pleasant and appreciative and because she never made scenes. _pp.61- 62)

ここに描かれたヘレンという女性が，ヘミングウェイの2番目の妻，ポー

リン・プファイファー（Pauline Pfeiffer）であることは種々のヘミングウェーの伝記から明らかであるが，ここではバーニス・カート（Bernice Kert）の『ヘミングウェイの女達』（*Hemingway women*）によってその相関性を追求し，云われていることの直相に迫ることにする。

「ポーリン・プファイファーだけは『春の奔流』について無条件の賛同を与えた。……ポーリンの賛同は効果をあらわした。アーネストは彼女がすぐれた文芸批評家と結論し，次第に彼女への関心を示すようになった」[4)] と述べられた部分はさきの引用文中の「鑑賞眼をもっている」とする言葉と符合し，又，彼女が「いい女で他の誰よりも一緒にベッドに入りたい」と思ったのは，「彼女はすんなりとして，均整がとれていた。出産後も体重が減らず，まだ34才だったにもかかわらず，中年に近づいたどっしりした感じを与えた最初の妻ハドレー（Hadley）とはちがっていた」[5)] からである。ポーリンが金持ちであったことは彼女の父が大地主で，実業家で治安判事であったことを記せば十分であろうし，又，叔父のガス・プファイファー（Gus Pfeiffer）は特にポーリンを可愛がり，彼女のヘミングウェイとの結婚にはキー・ウェストの住居を購入してくれたし，後のアフリカへの狩猟旅行ではその費用も提供してくれたばかりか，ヘミングウェイの作品の出版に際しても援助している。「古くさい自分の生活の残りを売り払った」ということはハドレーとの生活の清算を意味し，ポーリンとの生活に入ることの中には彼女の金に対する魅力がなかったとは云えないのである。「それを否定することはできなかった」とある。ヘミングウェイはハリー同様，この面においても「弱さ」と「不誠実」を示しているとも云える。ハリーのそしてヘミングウェイの「弱さ」と「不誠実」はベッドに横たわるハリーの回想の中にも読みとれる。

彼ハアノトキ，コンスタンチノープルデ一人出テ来ル前ニ喧嘩シタコトニツイテ考エタ。彼ハズット女ヲ買イツヅケ，ソレガ終ッテモ自分ノ寂シサヲマギラワセルコトガデキズ，一層寂シサヲツノラセタノデ，彼ハアノ最初ノ女，

彼ヲ棄テタ女ニ手紙ヲ書イテイタノダッタ。ソレハソノ寂シサヲ我慢デキナカッタト彼女ニ訴エル手紙ダッタ。アル時「レジェンス」ノ外デ君ヲ見カケタヨウニ感ジタ時ハスッカリボットナッテ胸ガ苦シクナッタトカ，ドコカ君ニ似テイルヒトヲミツケテ，ソレガ君デナイコトガワカルノヲ恐レ，初メニ君ダト思ッタ時ノ気持チヲ失ウノヲ恐レナガラ，ブールヴァールニ沿ウテツケテイッタモノダッタトカ，書イタ。自分ガ一緒ニ寝タ女ハダレモミンナ益々君ヲ思イ出サセルダケダッタトカ，君ヲ愛サズニハイラレナイノデ君ガ僕ニ対シテシタコトハ何デモアリハシナイトカ書イタ。

(*He thought about alone in Constantinople that time, having quarrelled in Paris before he had gone out. He had whored the whole time and then, when that was over, he had failed to kill his loneliness, but only made it worse, he had written her, the first one, the one who left him, a letter telling her how he had never been able to kill it . . . How when he thought he saw her outside the* Regence *one time it made him go all faint and sick inside, and that he would follow a woman who looked like her in some way, along the Boulevard, afraid to see it was not she, afraid to lose the feeling it gave him. How everyone he had slept with had only made him miss her more. How what she had done could never matter since he knew he could not cure himself of loving her.* _p.64)

この中で最初の部分で言及されている「喧嘩」というのはヘミングウェイが，ギリシャ・トルコ戦役を『スター』紙の記者として取材するためにハドレーをパリに残してコンスタンチノープルに出かける時の二人の間のことらしい。ハドレーにとっては一人でパリに残るさびしさとヘミングウェイの身を案じてのことだった。[6] しかしヘミングウェイはハドレーの干渉は彼の行く道の中の「障害」と思われ始めていたに違いない。この時は「黙りこんだまま」出かけたようだが，やがてそれは次第にはっきりと言

葉や態度にあらわれてくるように思われる。そしてこの「喧嘩」は，ハリーがヘレンと恋に落ちていく時の理由づけにもなっていたことが思い出される。その時はヘレン即ちポーリンはハドレーのように「騒ぎ立てる」女ではなかったのである。

この回想の中でハリーの云う「最初の女」とは云うまでもなく『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*) のキャサリンのモデルとされるアグネス・フォン・クロウスキー (Agnes von Kurowsky) のことである。ヘミングウェイがアグネスに手紙を書いたのは事実のようで彼はアグネスから長い返事を受取っている。しかしアグネスはそれから30年後に「アーネストの文面はなつかしさがあらわれていたが抑制のきいたものだった」[7] と語っているので，この作品の中で語られている内容とは異っている。しかしヘミングウェイの心中は作品が正直に物語っている。[やはり作品が最も真実を語るのだ。] ヘミングウェイはハドレーへの反発と，それからくるアグネスへの恋しさから売春婦を買ったのであろう。ハリーの回想は，《……好色なアルメニア女にのりかえた。その女は火傷する程彼に腹をこすりつけた。……彼等はタクシーに乗りこんでボスフォラス海峡沿いに……車を走らせ……床に入った。女は見かけどうりに盛りを越した感じだったが，スベスベして，バラの花びらを思わせ，蜜のようで，腹部はなめらかに，乳房は大きく，腰の下に枕をあてがう必要はなかった》(. . . a hot Armenian slut, that swung her belly against him so it almost scalded. . . .They got into a taxi and drove. . . along the Bosphorus. . . and went to bed and she felt as over-ripe as she looked but. . . smooth-bellied, big breasted and needed no pillow under her buttocks." _p. 64) と続いている。ヘミングウェイは後に少年時代からの友人であるビル・スミス (Bill Smith) —— "The Three-Day Blow" に出てくるBill —— に，1922年の秋ユンスタンチノープルで一度だけハドレーを裏切った，と告白した。[8] そしてこのことは殆どそのままに「非常に短い話」("A Very Short Story") の中に結実している。ただこの物語の結末の部分で主人公

がデパートの女店員から淋病を移されるという出来事は，ヘミングウェイのマゾヒステック・ヒューマーとも考えられて興味深い。

ヘミングウェイはこのように自己の「安楽」のためにハドレーを捨ててポーリンを選び，彼の大好きなサファリや大魚釣りを楽しみ，更にキー・ウェストの彼女の叔父から贈られた家で執筆に専念できたにもかかわらず，今「キリマンジャロの雪」の中でポーリンを非難し始めているのである。ハリーは「君のいまいましい金」(Your bloody money _p. 55) といい，又金持ちを「特別に魅惑的な種族だと考えていた」(a special glamorous race _p. 71) ジュリアン(Julian) ——実はスコット・フッツジェラルド(Scot Fitzgerald) ——のことを引合いに出している。「この女の金のために自分はこんなざまに……」という言葉がハリーの口から今にも飛び出さんばかりである。フィツジェラルドの『偉大なるギャッビー』(*The Great Gastby*) を「第一級の作品」(an absolutely first-rate book)[9] と評したヘミングウェイにはギャッビーと金持ちの女デェイズィ (Daisy) の関係が脅迫観念となって迫ってきたのかも知れない。「この女がいなくなればおれは好きなもの全部が手にいれられるんだ。全部ではないにしても今あるものは全部だ，と彼は考えた」(When she goes, he thought. I'll have all I want. Not all I want but all there is _p. 69) という風に彼の思考は発展する。ヘミングウェイの "dishonesty" はポーリンに対しても行われてきた。ジェーン・メイソン (Jane Mason) との関係——それについては後述——もその一つであった。それによってヘレンは「めちゃめちゃ」にされたのである。

「あなたは私をめちゃくちゃにしはしないでしょう？　私はあなたを愛し，あなたの望んでいる事はなんでもしたがっているただの中年の女よ。私こそ二，三度あなたにめちゃめちゃにされたわ。あなたはもう二度と私をめちゃくちゃにするようなことはしないわね。

「おれは君をベッドの中で二，三度やっつけてやりたいね」と彼は言った。

「そうよ。それはいいやっつけ方だわ。そんな風にやっつけっこできるのだわ」

('You don't have to destroy me. Do you? I'm only a middle-aged woman who loves you and wants to do what you want to do. I've been destroyed two or three times already. You wouldn't want to destroy me again,would you?'

'I'd like to destroy you a few times in bed,' he said.

'Yes. That's the good destruction. That's the way we're made to be destroyed. _pp. 62 - 63)

ここには今までの男の「不誠実」をも水に流して男を愛し，男に愛されようとする女がいる。"bitch" のかけらも存在しないのだ。その点についてヘミングウェイもハリーに云わせている。「たとえ彼が生きのびたとしても彼女のことは決して書かないだろう」(. . . if he lived he would never write about her, _pp. 70 - 71) と。しかし実は彼女のことを悪くは書けないのだ。

実際ポーリンのヘミングウェイに対する気持ちには並々ならぬものがあった。彼女は「金持ちの悪女」(rich bitch) と云われないように懸命に努めた。カートからその様子を1箇所だけ引用することにする。「この時彼女（ポーリン）は長い間忘れていた子供の頃の貯金から2308ドルを受取った。『貯金は受取るというのがパパの考えでしたね。返さねばならない人は誰もいないし，お望みならもっと多く持ち帰ってもいいのよ。こんな汚らしいお金，すぐ使って頂戴。[ただもっと欲しいなら] 知らせてね。外の女の人をつくらないでね。あなたのポーリン。可愛そうなパパ。お金持ちのパパ』ポーリンは高圧的な金持ちの妻になるまいとつとめ，金について冗談を云った」。[10] しかしヘミングウェイはこの金の負い目と己れの自負心にこだわり続けた。ポーリンは更に自分の髪の色をジェーン・メイソンを意識して金髪に染めてまでヘミングウェイのゆらぐ心を引きとめようとしたのである。[11]

今までヘレンの「強さ」についてはあまり言及しなかった。しかし云ってみればこの女性の「強さ」がハリーには最も堪え難いことだったかも知れない。ヘレンにとって夫のハリーのために良しと思ってする事がハリーには我慢ならなくなってくるのだ。今まで考察してきた如く，ヘレンは絶えずハリーのために尽くしており，死も間近い彼の気持ちを引立て，明るくしようとしている。それも彼女の「強さ」なのだろうが，それと同時にこれまでの彼女の履歴も彼女の頑張りを物語る。彼女は前の夫が彼女の若いときに死ぬと一時は悲しみのためか酒に親しんだこともあるが，「恋人が出来るとあまり酒を飲まなくなった。眠るために酔う必要もなくなったからである。……彼女の子供のうち一人は飛行機事故で死んだ」（After she had the lovers she did not drink so much because she did not have to be drunk to sleep...one of her children was killed in a plane crash... _p. 61）にも拘らず，ヘレンはハリーとの関係の中に自分を確立していこうとしているのである。そのような女の「けなげなさ」或いは「強靱さ」が又ハリーには気に障るのである。それは又この作品には書かれていないが，次の「フランシス・マコーマーの短い幸せな生涯」にその片鱗をのぞかせるヘミングウェイの裏切り行為とも関係がありそうである。ハリーがヘレンをもはや愛さなくなった理由はこの「キリマンジャロの雪」の中だけでは到底探し得ない。せめて云えることはヘレンが金持ちであり，そのヘレンの金で長い間ハリーの生活が蝕まれ，意義ある仕事が出来なかったと，相手に責任を転化しているとしか思えないのである。ヘミングウェイの三男グレゴリーの彼の母ポーリンとヘミングウェイの当時を物語る次の言葉は，この「キリマンジャロ」の謎を解く大きな手掛りとなるように思われる。

1930年代の後半，彼はハバナでアメリカ人の女友達と不義をして母を裏切った。それは非常にひんぱんになされたので母のために残されたものはなかった程のものだった。一度，母が予期せざる時に現場に現れたので父は一度ホテ

ルの窓から飛び下りて足の指を折りそうになったことがあった。

全くけしからんことだ。彼の妻はみなそうだった。母が「私はアーネストが恋をするのは気にしないけれど，だけどその度に何故いつも結婚しなければならないかというのよ」と云ったとき，その気持ちが理解できた。

彼は一定期間一人の妻と一緒にいると澱みを感じるだろう。たいていの男はそういう風に感じるだろう。しかし創造的な芸術家にとっては一般人よりももっとそれは激しいと思う。何故なら彼の全存在は霊感に依存しており，彼等はその創作のモーターを動かす新しい刺激的な経験が必要なのだ。[12)]

自分の経験を観察しそれを文字にすることには極めて秀れた才能を見せるヘミングウェイではあったが，「百万人の心を持つ」(milliard-minded) ヘミングウェイではなかったから，何よりも書くために非情になることも必要だし，新しい恋は彼に創作のエネルギーを与えたのだ。このあたりにこの作品でハリーの云う「もう彼女を愛していない」という理解し難い表現に何らかの回答が与えられるのではないかと思う。しかし，ヘレンの，そしてポーリンの必死の堪忍と苦しみの声はその裏側からやるせなく聞こえてくる。

II

「フランシス・マコーマーの短い幸せな生涯」(“The Short Happy Life of Francis Macomber”) のマーガレット (Margaret) は，「キリマンジャロの雪」のヘレンや『陽は又昇る』(*The Sun Also Rises*) のブレット・アシュレイ (Bret Ashley) と共に作者から又批評家からも「悪女」(bitch) と云われた女である。この物語の最後の部分で——これがクライマックスなのだが——マーガレットが発砲した銃口が夫のフランシスを故意にねらったものか，それとも水牛の頭をねらったものの，水牛が急に頭を下げたために偶然「夫（フランシス）の頭蓋骨の基底の2インチばかり上部のちょっと片方へ寄ったところに命中」(. . . hit her husband about two inches

up and a little to one side of the base of his skull.–p. 39）したのかはこれまで多くの批評家の論争の的となってきたところであるが——そして多くの批評家はそれを故意とみなしてきたようであるが[13] ——その理由は恐らくマコーマーがこの物語の中で用いている“bitch”という語，及び白人狩猟家ロバート・ウィルソン（Robert Wilson）によるマーガレットを含めたアメリカ女に対する辛辣な言葉によるものと思われる。即ちウィルソンは考える。

「……この連中(アメリカ女)こそ，世界中でいちばん非情だ，……一番非情で一番残酷で，この上なく掠奪的でしかも極めて魅力ある連中だ。この女どもが非情になっていくにつれて彼女等の男達は柔弱になるか，神経をずたずたにやられてしまうのだ。それとも彼女等は扱い易い男達を選ぶということなのか？　結婚する年令ではそんなことはあまりわからないのだが，……」（They are, he thought, the hardest in the world; the hardest, the cruellest, the most predatory and the most attractive and their men have softened or gone to pieces nervously as they have hardened. Or is it that they pick men they can handle? They can't know that much at the age they marry, he thought.–p. 15）

「……全くもって例のアメリカ女の残酷さをエナメルみたいに光らせている。彼女等といったら最もいまいましい奴等だ。全くもってこの上なくいまいましい連中だ」（. . . simply enamelled in that American female cruelty. They are the damnedest women. Really the damnedest. –p. 16）

これはマコーマーが手負いのライオンが草むら前方35ヤードのところから突進した時，狂気のように反対の川岸の方に逃走した後，マーゴット（マーガレットの略称）がウィルソンに「赤ら顔の美男のウィルソンさん，ごきげんいかが？「(How is the beautiful red-faced Mr.Wilson？

_p. 15) と近づいた時のウィルソンの心中独白である。しかしここで不思議なことはウィルソンがマーゴットを含めてアメリカ女というものをこのように判断する材料はこの物語ではそれまでに何も語られていない。ウィルソンはどうしてそのような判断に達したのであろうか。なる程この物語の最後でウィルソンはマーゴットが故意にマコーマーを目がけて銃の引き金を引いたのだと判断はするが，そのことだけではこのアメリカ女全体に対する判断は不可能なばかりか，たとえそうしたとしても原因と結果（判断）が前後することになる。又マーゴットが自分の寝床を抜け出してウィルソンの寝床にもぐり込んだ事件も実はこの判断の後に起こることなのである。たとえ百歩ゆずって行為とそれに対する判断の倒置を是認したとして，その判断がマコーマーによってではなくウィルソンによってなされることも一つの問題点となるであろう。

先ず第一にこの「アメリカ女」に対してここになされている判断はマーゴット個人に対する判断から引き出されているとはとても思えないことは上に述べた理由からも明かである。「世界で最も非情である」とか「神経をずたずたにやられてしまう」という言葉は，たとえ「残酷」という言葉が，マーゴットの行為の故にこの場合当てはまったとしても，この場面だけからは導き出せない。

けれどもウィルソンは例のライオン狩りの後でマーゴットが夫のマコーマーにむしろ優しい言葉をかけているのを聞きながら更に考える。「自分の夫が途方もなく臆病者だとわかった時，女はどのように振舞うものだろう？この女は途方もなく残酷な女だが，奴らはみんな残酷なのだ。彼女等は勿論支配する，そして人を支配するためには残酷さも必要だ。今までにも彼女らのテロ行為には十分お目にかかったものだ」(How should a woman act when she discovers her husband is a bloody coward? she's a damn cruel, but they are all cruel. They govern, of course, and to govern one has to be cruel. Still, I've seen enough of their terrorism._p.17)

このウィルソン のアメリカ女に対する再々度のモノローグは，ライオン狩りの後，マコーマーがインパラを射止め，その肉をウィルソンも含めてみんなで旨そうに食べながら，そしてそのカモシカをマコーマーが仕止めたことを話題にしながら，マーゴットが「わたしとても嬉しいわ」(I'm so glad. _p.16) と云って夫をたたえた後，ウィルソンが「今夜はライオンのためにシャンペンを抜きましょうよ？」(To-night we'll have champagne for the lion, _p.17) とライオンの件をを持ち出すと，「ああ，ライオンね……ライオンのことを忘れていたわ」(Oh, the lion ; . . . I'd forgotten the lion! _p.17) とマーゴットはむしろライオン狩りでのマコーマーの不甲斐なさを忘れようとする，或いは夫をかばおうとする一連の言葉のあとのものである。しかるにここに執拗にくりかえされる独白はウィルソンに何らかの先入観がなければこのような思考は生まれてこないのではないか，というのが私の疑問である。

マコーマーがライオンから逃げ出した日の夜，マーゴットがウィルソンの寝床に自ら出かけていくという場面もよく考えてみればかなり唐突である。先ず積極的に女性側から男性に対してキスをすること，そしてその夜男性ならともかく女性側から正真正銘の夜這いに出かけるということがありうるだろうか。そして実に最後のクライマックスの場面をも含めてそのようなことをすれば彼女はこの「……非常な金持ちであり，もっともっと金持ちになる筈」(very wealthy, and would be much wealther _p.26) であり，「余りにも金持ちであるためにマーゴットには彼のもとを離れる決心のつかない」([Macomber] had too much money for Margot ever to leave him _p.27) マコーマーとの別れの危険を意識しない筈はないからである。逆に云えばそれを意識しておればこれ等の行動はとれない筈である。

次の会話はマーゴットのそのような状況を説明しているとも考えられるものである。ここではマコーマーもマーゴットも互いに相手を手離せないということを認めているようでもあり，マーゴットはふて腐れた駄々っ子

をたしなめる母親に似ている。そしてマコーマーがライオン狩りで，自分が臆病者であることを大勢の前ではっきり見せてしまった後のものである。

「ぼくはたわごとを云っているんじゃない。胸がむかついているんだ」

「胸がむかつくとは，おだやかな言葉じゃありませんね」

「フランシス，お願いだから冷静に話しをして下さいね」彼の妻は云った。

「ぼくはこの上なく冷静に話しているんだ。こんなきたならしい食物を食べたことがあるのかね？」とマコーマーは云った。

「食物がお気に召しませんか？」ウィルソンは静かに尋ねた。

「他の物と同様にいやだね」

「旦那，私もお力になりますから。給仕のボーイに少し英語がわかる者がいますから」

「いたってかまうものか」

ウィルソンは立上って，パイプの煙をくゆらせながらゆっくりと歩いて向こうへ行き，彼を待って立っていた鉄砲持ちの一人にスワヒリ語で二言三言話をした。マコーマーと彼の妻はテーブルについたままだった。彼は自分のコーヒー茶碗を見つめていた。

「もしあなたがみっともないまねをなさったら，私あなたと別れるわ」とマーゴットは静かに云った。

「いや，君は別れないよ」

「じゃ，やってごらんなさい」

「君は僕のもとを去るようなことはないよ」

「そうよ，私はあなたと別れませんし，あなたは分別のある行動をとってちょうだいね」

「分別ある行動をとれって？　よく云うわ。分別ある行動だなどと」

「そうよ。分別ある行動をとってちょうだい」

「なぜ『君』はそうしようとしないんだ？」

「ずい分長い間そうしてきたわ。とっても長い間」

('I'm not talking rot. I'm disgusted.'

'Bad word, disgusted.'

'Francis, will you please try to speak sensibly?' his wife said.

'I speak too damned sensibly,' Macobmer said. 'Did you ever eat such filthy food?'

'Something wrong with the food?' asked Wilson quietly.

'No more than with everything else.'

'I'd pull yourself together, laddybuck.' Wilson said very quietly.'

'There's a boy waits at table that understands a little English.

'The hell with him.'

Wilson stood up and puffing on his pipe strolled away, speaking a few words in Swahili to one of the gun-bearers who was standing waiting for him. Macomber and his wife sat on at the table. He was staring at his coffee cup.

'If you make a scene I'll leave you, darling,' Margot said quietly.

'No, you won't.'

'You can try it and see.'

'You won't leave me.'

'No,' she said. 'I won't leave you and you'll behave yourself.'

'Behave myself? That's a way to talk. Behave myself.'

'Yes. Behave yourself.'

'Why don't you try behaving?'

'I've tried it so long. So very long.' _p. 29)

ここにはやや唐突ながらヘミングウェイと彼の母グレイス・ヘミングウェイ（Grace Hemingway）との間の雰囲気を彷彿させるものがある。特に彼が『日はまた昇る』を出版した時彼女が語ったと云われる「お前がもっと価値あることをしてくれることを信じているわ」[14] という愛情をこめて

たしなめるような雰囲気である。そしてマーゴットがやがて間もなく夫を銃の標的にしようとする気配や殺意の呼吸はどこにも感じとれない。

さてこの「殺意」について Whitlow の見解を引用してみよう。故意の殺人か偶然の殺人かはこの作品の最も興味ある論点だからである。

「殺意論は三つの理由のために間違っている。その一つは，突進してくる水牛は2分後にはフランシスを殺すはずである。それ故（彼女が）フランシスを殺すことは必要のないことであり，法的にも不必要に危険である。二つ目に，マーゴットが水牛が死んでいないで突進するのを見て，機会を捕え，マリンヒャー銃を準備して発砲するための技術上の手順を行う時間が十分存在しない。そして三番目に，これが最も重要なことだが，テキストにはそう書いてない」[15] としている。そして最も重要とされる第三の理由を次のように述べている。

> マーゴットが殺人犯でないという三番目の論証はテキスト自身の中に見出される。この物語を申し分なく正確に語り続けてきたヘミングウェイの語り手は，「マコーマー夫人は6.5のマンリッヒャー銃で水牛を射った（*at the buffalo* _p. 39）ときっぱり言っている。」「水牛を射つ振りをしながらフランシスを射った」のでも又「『不慮の事故として』彼女の夫を射った」のでもなく（多くの批評家がこのように推論しているのは理解できない），単純且つ明白に「水牛を射った」のである。二世代にわたる批評家がこれらの言葉を読みながら，マコーマーの「男らしさ」と，マーゴットの「悪女」と殺人それ自体についてのウィルソンの認識を正確なものとして，テキストを信じなかったという豊富な証拠をつきつけられれば，「言葉への忠誠が宗教であるヘミングウェイのような作家にとって『フランシス・マコーマーの短い幸せな生涯』の批評の運命は，もし彼がそれを知ったなら，よく言えば学者の愚かしさ，悪く云えば無責任な論証捜索の悲しむべき悪例であったに違いないというロバート・ホーランドの見解を受入れざるを得ない」[16] と論断する。

さてこれまでの悪女論に対するこのような反論にもかかわらず，ウィル

ソンに，そして又マコーマーにマーゴットを“bitch”と云わせているものは何であろうか。「非情で，残酷」といわせているものは何か。それを解く鍵はやはりヘミングウェイの伝記的事実にあると云えるであろう。ヘミングウェイは云う。「彼女（マーゴット）は，（その頃）ぼくの知っていたいちばん手に負えない悪女をモデルにして描いた人物だ。はじめて会った時，その女は愛らしかった。とはいえ別にぼくにとっておいしい御馳走や，鳩や，一杯のお茶のごとき存在だったというわけじゃあない。もっとも彼女にとっては，ぼくがいま言った全てに該当したわけだが，これをどういう意味に解釈されようとご随意に」[17] といささか色男振って述べている。そしてその女性がヘミングウェイがキー・ウェストやキューバで親しくしていた「キリマンジャロの雪」に関する論評の中でも言及したジェーン・メイソンであることが実人物と作品上の人物との多くの一致点から推察されるのである。マーゴットの概観や容貌は次の如く描写されている。

> マコーマー夫人はちらっとウィルソンの顔を見た。非常に美貌の女性で，その美しさと社会的地位のために，一度も使ったことのない化粧品のための推薦用の写真を提供するだけで5千ドルもせしめたことがあった。(She was an extremely handsome and well-kept woman of the beauty and social position which had, five years before, commanded five thousand dollors as the price of endorsing, with photographs, a beauty product which she had never used. _p. 11)

ジェーンについては，バーニス・カートは，「22才でジェーンは既に美人の評判が高かった。彼女は中背の，すんなりと均斉のとれた体をしており，顔はすばらしく整っていて，青い目をしていた」[18] し，「外観上完全な卵型の顔と，髪を後ろに引きつけて，頚のところで束ねているマーゴット・マコーマーは疑いもなくジェーンをモデルにしている」[19] と書いている。マーゴットについての記述は先に引用したものの外に，この「卵型の顔」

を強調して，次のように面白い描写をヘミングウェイはしているのだ。「彼女は完全な卵形の顔をしていた。あまりにもそっくり卵形なので馬鹿じゃなかろうかと思わせる程だった」(She had a very perfect oval face, so perfect that you expected her to be stupid. _p. 15)。実にウィルソンは，「彼女が……うすいカーキ色の服を着，黒い髪を額から後ろにひきつけ，低く頚の上のところで束ねている様子は，美しいというよりも可愛らしく見えた」(. . . her. . . looking pretty rather than beautiful in her faintly khaki, her dark hair drawn back off her forehead and gathered in a knot low on her neck, _p. 17) のであり，これはカートの記述と符合する。ただ髪の色については，カートが「赤色がかった金髪」(strawberry-bloude hair)[20] としているのに対し，ベーカーは「ふさふさとした黒髪」(a wealth of dark hair)[21] として違いがみられる。

ジェーン・メイソンは18才でキューバのアメリカン航空の社長と結婚，そして彼女が22才の時ヘミングウェイ夫妻と航海中の船の上で知り合った。そしてジェーンの夫のグラント・メイソン（Grant Mason）が，マコーマーの如く，「大金持ちで，将来もっともっと金持ちになる筈（very wealthy, and would be much wealthier _p. 26）であったことは言うまでもない。そしてヘミングウェイはジェーンを釣りに連れ出したりなどして，二人は非常に親しくなっていったようであるが，ポーリンは内心はともかく，このことについてはかなり堪えていた模様である。これは前章でヘミングウェイの三番目の息子グレゴリーの文章から，かなり詳しく引用した。

しかし，ヘミングウェイとジューン・メイリンとの関係も終わる時がくる。「1935年の夏，……ヘミングウェイはジェーンを釣りにさそう手紙を書いた。彼は彼女に数カ月会わなかったし，手紙ももらっていなかった。彼女が手紙をくれなかった理由は，冬の間アフリカ旅行に出かけていたということだった。その冬のアーネストの気嫌の悪さは，彼女に会えなかっ

たこと，彼女がマンヤラ湖畔に家を持つイギリス人クーパー大佐に興味を持ったということによるものだったかも知れない」。[22] そして「フランシス・マコーマーの短い幸せな生涯」が発表されるのはその翌年1936年のことである。非難を自分よりもいつも他に向ける傾向を強めつつあったヘミングウェイにとってジェーンは恰好の餌食となったのである。彼女の情事の裏切りはマーゴットによって普遍化され，更にウィルソンやマコーマーによって「悪女」呼ばわりされた上，「殺人者」へと向う。ヘミングウェイはその巧みなストーリー，テリング(storytelling)によって，読者を，そして批評家をも煙に巻いていく。さきに引用した Whitlow の「マーゴットには全然故意はなかった」という分析もここに至って少し色褪せてくる。実際ヘミングウェイが「マコーマーは心臓がどきどきし，口の中はまた乾いてきたが，それは興奮のためであって，恐怖のためではなく」(. . . Macomber felt his heart pounding and his mouth was dry again, but it was excitement, not fear. _p. 38)，水牛に近づいて行く時，マコーマーは車の中のマーゴットに手を振るのだが，「彼の妻は銃を横において彼の方を見ていたが，彼に手を振りかえさなかった」(. . . his wife, with the rifle by her side, looking at him. . . . and she did not wave back.) と書く場面も見逃すわけにはいかない。ヘミングウェイのジェーンに対する複雑な気持ちが，マーゴットの複雑な行動となって結実したともいえる。しかしマーゴットが百パーセントジェーンでないことは，ウィルソンが百パーセント，ヘミングウェイのサファリのガイド，フィリップ・パーシバルでなく，マコーマーが百パーセントジェーンの夫のグラントでないのと同様である。マーゴットはその外観について，「彼の妻は昔たいした美人だったし，今でもアフリカでみればたいした美人だった。けれどももはや本国では彼と別れて，いっそうよい暮らしを立てられる程のたいした美人ではなくなっていた。そして彼女はそのことを知っていたし，彼も知っていた」(His wife had been a great beauty and she was still a great beauty in Africa, but she was not a great enough beauty any more

at home to be able to leave him and better herself and she knew it and he knew it. _p. 27）と記されていて，それはジェーンよりもむしろポーリンの外観と一致するし，今一つはウィルソンやマコーマーについてかなり鋭い観察と批評がマーゴットによってなされている点である。その批評は，ヘミングウェイの狩猟に同行していないジェーンには到底なし得ないと思われるからである。ポーリンは，ヘミングウェイの「勇気」への異状なこだわりについて次のように云う。

「あなたは勇敢な態度がとれたとなると，どうしていつもそんなに嬉しそうなの」とポーリンが尋ねた。
「分からない」とアーネスト。「ただ嬉しくてならないんだ」
「すてきね」とポーリン。「でもどこか愚かしいわ」[23)]

これと殆ど同様なトーンの発言がマーゴットによってもなされている。狩猟と男らしさに対する批評ともとれる次のものである。ウィルソンがライオンを射止めた後でマーゴットは，「あなたのお手並みをもう一度，とてもとても拝見したいのよ。今朝のあなたはすばらしかったわ。獣の頭を吹っ飛ばすのがすばらしいと言ってよければ」(. . . I want so to see you perform again. You were lovely this morning. That is if blowing things' heads off is lovely! _p. 16）という。又，マコーマーとウィルソンが狩猟における勇気について，シェイクスピアの『ヘンリー四世』の中の文句を引用して揚々と語り合うのを聞きながら，「無力な獣達を自動車で追いかけたというだけで，まるで英雄になったような口のきき方をなさるのね」(Just because you've chased some helpless animals in a motor car you talk like heroes._p. 37）というマーゴットのコメントは，さきの外観の描写と共に，ポーリンのものと読みとることができるのである。一緒にサファリをしながらヘミングウェイはポーリンに急所を突かれたと思ったことであろう。そうでなければこれ等の文はこのように彼

によって残されはしなかったろう。

ヘミングウェイはポーリンの批評眼を高く評価していたことは前章で述べたが，ポーリンについては，キー・ウェストにいた当時の作家ジャック・ラテイマー（Jack Latimer）は「彼女は何をさておき私にヘレン・ヘイズ（Helen Hayes）を思い出させた。美しくはなかったが，大変人を引きつけるものがあり，とても頭がよかった。顔は美しいとはいえなかったが，とても聡明で機敏だったので魅力的だった」[24] と述べているが，それはこのサファリでのポーリンの論評と結びつく。

「フランシス・マコーマーの短い幸せな生涯」をこのようにみてくると，この中には色々と戸惑いを感じさせる要素があり，そのためさまざまな解釈を生じさせたこともうなづける。ここで最もみじめさと悲しさに超然としているのはウィルソン一人であるように思われる。ウィルソンは鉄砲持ちやキャンプのヘルパーに温情を示さないどころか，「無表情な，青い，機関銃手のような眼」（flat, blue, machine-gunner's eyes _p. 15）が示すようにむしろ彼こそ「残酷」であり，更に2人用のベッドを持歩いている姦夫の常習犯であり，そして最後にマーゴットを「殺人犯」と断定し，それを自分が隠蔽することによってマーゴットに恩を売ろうとする「悪女」ならぬ「悪党」であるとも言える（本論ではウイルソンの code hero 性は論じない）。それに対し他の主要なキャラクターであるマコーマーもマーゴットも悲しき存在である。マコーマーは勇者の栄誉を受けることなく死に追いやられ，マーゴットは「ビッチ」の烙印をもはや立上がれない程徹底的に押され，せいぜい「どうかお願い」（please）という哀願をすれば生命だけは助けてやろうと云われているのだから。

マーゴットはこのようにウィルソンによって残酷なアメリカ女としての取扱いを受けたわけだが，しかし彼の云う「この連中は……最も非情でもっとも残酷で……」（They are. . . the hardest, the cruellest. . . ）の複数形はどう説明すべきか。この作品ではアメリカ女は一人しか現れない筈だが。

Ⅲ

ヘミングウェイは，父クレランス・ヘミングウェイ（Clarence Hemingway)が1928年ピストル自殺をした数年後に執筆した「父と子」(“Fathers and Sons”）には，このクレランスを懐かしむと同時に，彼の死に関して責任あるとする人達のことをほのめかし，「また父は非常に運が悪かったし，その運の悪さは必ずしも全部彼の負うべきものではなかった。彼はほんのちょっとわなをかける手伝いをしただけだったが，そのわなにかかって死んだ。人々は父の死ぬ前に様々のやり方ですっかり彼を裏切った。センチメンタルな人は全て何度となく裏切りに出会うものだ」（Also, he had much bad luck, and it was not all of it his own. He had died in a trap that he had helped only a little to set, and they had all betrayed him in their various ways before he died. All sentimental people are betrayed so many times. _p. 406）と書いている。ヘミングウェイが「父はほんのちょっとわなをかける手伝いをした」というのは，1924年彼の母グレイスが父にフロリダ（Florida）の土地にオークパークの家を抵当にして無理な投資をすすめたことを指しているのである。母の理由はフロリダの景色と気候が気に入り，自分がそこでオークパークとは異なり，一年中絵を画くことができるということであった。そしてその投資のために父は折りからの不況の波を受けたこともあり，たえず体を酷使して仕事をつづけ，精神もずたずたにされていった。彼が自殺したのはその土地購入からわずか4年後のことであった。父の葬儀の費用は叔父のジョージと義理の息子スターリングが支払う有様だった。その時は又ヘミングウェイもスコット・フィッジェラルドに旅費を借りてニューヨークからオークパークに駆けつけることになる。[25)]

ヘミングウェイの母は，このフロリダの土地ばかりでなく，これまでも自分のやりたいことはいつもやり通してきた。オークパークで最初の家から自分の音楽室をを確保するために更に大きい家を建てて移り住んだこと，

そして夫の反対も押し切ってロングフィールド・ファームに別荘を建てたこと，などがそれである。ヘミングウェイが21才の時，母の怒りを爆発させるようないたずらをして，北ミシガンの別荘ウィディミアから追い出されるという事件，又『日はまた昇る』を「今年の最も汚らわしい本」などと云ったといわれることもヘミングウェイの心の中に母に対するかたくなな反発をつくり出していったのかも知れない。その母への敵意が「マコーマーの短い幸せな生涯」における「あのアメリカ女の残酷さ」(that American female cruelty) の基底をつくりあげていったのではないかという思いを募らせる。そしてこの「アメリカ女の残酷さ」と結びつくのがマーゴットの故意か偶然かのマコーマーを死に至らしめた銃弾である。それはヘミングウェイの巧みさのために ambiguous にとどめ置かれているが，母グレイスの父クレランスに対する対処にかかわる認識を暗示させているとは言えないだろうか。

"They are . . . the hardest, the cruellest . . ." の中の "They" の中に含まれるべき女として母グレイス・ヘミングウェイの頭の中にあったことは以上から想像されると思うのだが，その他の女の中に，メイソンとポーリンが浮かびあがることも以上の考察で明らかである。そしてこの後者の二人を決定的づけるものが「キリマンジャロ」や「マコーマー」の出版の一年後の1937年に発表された『持つと持たぬと』(*To Have And Have Not*) の中に見出される。この『持つと持たぬと』では，ヘミングウェイは作家リチャード・ゴードン (Richard Gordon) として登場する。次の会話は，ゴードンが，ジェーン・メイソンのモデルであるブラッレー夫人 (Mrs. Bradley) との情事のあとと考えられる場面の細君とのものである。

「何だい」リチャード・ゴードンは細君に云った。

「ワイシャツに口紅がついているわ。それに耳のところにも」細君が云った。

……

「いいわ。もうおしまいよ。あなたがそんなに自惚屋でなかったら，そして私がこんなにあなたに尽くしていなかったら，とっくにおしまいになっていた筈よ」

「このビッチめ」

「いいえ，私は悪い女じゃないわ。私はいい奥さんになろうと努力してきたのよ。でもあなたときたら，自分勝手で自惚屋で，まるで牡鶏だわ。いつも，『俺の仕事振りを見ろ。俺のおかげでどんなに幸せか。さあ，とっととかけて，こっこと鳴きな』とわめいているわ。でもちっとも幸せにしてもらえなかったし，それで私はあなたにはうんざりよ。こっこと鳴くのももうご免だわ」

……

「……あなたなんか大嫌い。今日のあのブラッドリィの女で，堪忍袋も緒が切れたわ」

「ああ，彼女なんかに構わんでいい」

「身体中口紅をつけて帰って来て。洗うことも出来なかったの？　額にもいくらかついているわ」

('Well?' Richard Gordon said to his wife.

'You have lipstick on your shirt,' she said. 'And over your ear.'

. . . . . .

'All right,' she said.'It's over. If you weren't so conceited and I weren't so good to you, you'd have seen it was over a long time ago'

'You bitch.'

'No,' she said. 'I'm not a bitch. I've tried to be a good wife, but you're as selfish and conceited as a barnyard rooster. Always crowing, "Look what I've done. Look how I've made you happy. Now run along and cackle." Well, you don't make me happy and I'm sick of you. I'm through cackling.'

. . . . . .

. . . I dislike you. this Bradley woman to-day was the last

straw.'

'Oh, leave her out of it.'

'You coming home with lipstick all over you. Couldn't you even wash? There's some on your forehead, too.' _pp.143 - 144.)[26]

「キリマンジャロ」では，ハリーの悪態にも一生懸命に堪えていたヘレンも，こにきて途に堪忍袋の緒を切らす細君となっている。そしてゴードンへの怨みつらみが堰をきったように彼女の口から流れ出す。愛というものが如何にごまかしで，「女を有頂天とかにさせて，自分は口をぽかんと開けて眠りこけてしまうものに外ならない」(you making me happy and the going off to sleep with your mouth open _p.146) し，又あなたときたら，「意地悪でやきもち焼きで，流行に合わせて政治的態度を変える，人の前ではおべっかいを使って，裏へ廻ると悪口をたたく」(bitter, jealous, changing your politics to suit the fashion, sucking up to people's faces and talking about them behind their backs. _p.147) 見下げ果てた男だとののしりの極みをつくすのである。「キリマンジャロ」と「マコーマー」の中でポーリンとメイソンの二人の女の危険なバランスの中を泳いでいたヘミングウェイも，ここでポーリンの最終的な言葉に出合うのである。上に引用したいくつかのゴードンの妻ヘレン——ヘレンという名前は「キリマンジャロ」のヘレンと同名である——の言辞はまさにそのままポーリンのものであると察せられる。そしてそのポーリンとの破局を決定づけたのがジェーン・メイソンという女の存在であった。それを暗示するかの如くヘミングウェイは彼女との濡れ場を回想の中に折り込むのである。それは真に迫る情事の生々しい場面である。

「リチャード・ゴードンハ振リ向イテ，彼ガ戸口ニ重々シク，髭ヲ生ヤシテ立ッテイルノヲ見タ。

「止メナイデ」エレーヌハ言ッタ。

「ネ，止メナイデ」彼女ノ輝ク髪ガ枕ノ上ニ広ガッテイタ。

シカシ，リチャード・ゴードンハ止メテイタ。ソシテ彼ノ顔ハマダ振リ向イタママデ，ソノ男ヲ見ツメテイタ。

……

「アレハトミージャナイノ」エレーヌハ言ッタ。「彼ハ皆知ッテルノヨ。彼ノコト気ニシナイデ。サア，アナタ，シテ」

「僕ハデキナイ」

「駄目ヨ」エネーヌハ言ッタ。彼ハ彼女が震エテイルノガワカッタシ，彼ノ肩ノ上ノ頭も震エテイタ。「ネエ，アナタ何ニモ知ラナイノ？　女ノ身体ノコトワカラナイノ？」

「僕ハ帰ラネバナラナイ」

暗ガリノ中デ彼ハ顔ヲ撲タレ，目玉ガチカチカシタ。モウ一度今度は口ヲピシャリトヤラレタ。

「アンタ，コウイウ人ダッタノ」彼女ハ言ッタ。「私ハアナタガ男ノ中ノ男ダト思ッテイタワ。サッサト出テイッテ」

コレガ今日ノ午後ノコトダッタ。ソシテソレデブラッドリー家トノ関係ノ終リダッタ」

(*Richard Gordon had turned his head and him, standing heavy and bearded in the doorway.*

'Don't stop,' Hèléne had said. 'Please don't stop.' Her brigh t hair was spread over the pillow.

But Richard Gordon had stopped and his head was still turned, staring.

. . . . . .

'That's only Tommy,' Hèléne had said. 'He knows all about these things. Don't mind him. Come on, darling.Please do.'

'I can't.'

'You must,' Hèléne had said. He could feel her shaking and her head on his shoulder was trembling. 'My God, don't you

know anything? Haven't you any regard for a woman?'

'I have to go,' said Richard Gordon.

In the darkness he had felt the slap across his face that lighted flashes of light in his eyeballs. Then there was another slap. Across his mouth this time.

'So that's the kind of man you are,' she had said to him. 'I thought you were a man of the world. Get out of here'

That was this afternoon. That was how it had finished at the Bradleys.' _p. 149)

エネーヌの亭主に見られては，小説家ゴードンも愛の行為を続けることはできないのである。そしてそのいくじなさのために，顔を引っぱたかれ，エネーヌとの関係も終るのである。ヘミングウェイとジェーン・メイソンの関係は色々と考察すると，どうもジェーンの方から去っていった可能性が高い。そしてそういう場合ヘミングウェイは概してマゾヒステックな快感に身をゆだねる傾向があるように思われる。アグネスに振られた気持ちをえがいた「非常に短い話」では，シカゴのタクシーの中でデパートの店員から淋病をうつされるし，さきの「マコーマー」では，銃弾を浴びせられる。そして，ここでは平手打ちを二度されて，絶交を言い渡される。ヘミングウェイのマッチョ像の裏側をみる思いだが，それだけに作家が全部を正直に告白しているところが，微笑ましい気がする。ちなみにジェーン・メイソンはその後三回結婚しているから，彼女もヘミングウェイに劣らず性豪であったのかも知れない。

この「マコーマー」にはプロットが存在していた。ウィルソンのモデルとされるフィリップ・パーシバルからヘミングウェイがキャンプファイヤーの傍で聞いた実話がそれである。ジェフリー・メイヤーズ（Jeffrey Meyers）はその著 *Hemingway* の中で，その話をくわしく跡づけ，アフリカ原住民の話として次の箇所を引用している。その中の Paterson は狩

猟ガイドであり，Blythがもう一人のヨーロッパ人で，the ladyはブライスの妻である。それはこうである。

パターソン大佐ともう一人のヨーロッパ人が大喧嘩をしたが最後には握手して仲直りをした……［ブライス］が帰った時彼は病気になっており，気違いになった人みたいだった。我々は彼の頭に冷たい水をかけ，彼は次第によくなった。夫人は彼を恐れていたに違いない。というのはパターソンのテントに行って寝たからである……

私達は夫人がその病人の テントを出てパターソン大佐のテントに行くのを見た。彼女は一晩中そこにいた。朝になって……［彼女は］夫のテントにもどった。彼女が入るや否や私達は銃声を聞いた。そして夫人は走り出ていった。私達はそのテントに走って行ってみるとそのヨーロッパ人が口に弾丸を打ち込み，それは耳の近くに貫通していた……そのヨーロッパ人の死後，パターソン大佐とその婦人は一つのテントに寝た。[27]

このようにみると作中のマーゴットの外観や言動には，ポーリンやメイソンやブライス夫人が、そしてマコーマーの死はブライスが事実から取入れられているが，最も肝要なマコーマーの死に至る経緯はヘミングウェイのこれまでに蓄積された想像力から来たものと云えるのである。「アメリカ女の残酷さ」は遂に「殺人」となって具体化した。「作家の生涯は彼の想像力のための材料を提供するが，彼の小説は想像の方法であり，人生の変形でもその拡大でもない」[28] という小説論はこの作品において立派に立証され，それ故にこの作品の評価を高めていると云えるのである。その萌芽は既にあの「インディアン部落」(“Indian Camp”) にでていた。これこそ彼の女性に対するobsessionを最も印象的に表現したものである。

「自殺する男の人はたくさんいるの，とうちゃん」
「そんなにたくさんはいないよ。ニック」
「女の人はたくさん自殺するの」

「ほとんどしないよ」

("Do many men kill themselves, Daddy?"

"Not very many, Nick."

"Do many women?"

"Hardly ever." _p.89)

ヘミングウェイが父の自殺は母のせいだと公言し，"that bitch" という表現まで後に使っているが,[29] 父親の自殺の3年前に発表されたこの「インディアン部落」では，父の自殺のために母を非難することはできなかった筈であるから，彼の女性に対する認識と感情はずっと以前から形成されていたのであろう。そしてその認識や感情は具体的には誰を通してかということだが，インディアンの少女プルーデンスや,「ある事の終り」("The End of Something")のマージョリーとは考えられない。ここでこれら二人の女の子にたいする論評は行わないが，彼女らは極めてニック(Nick) に従順な女達なのである。しからば彼の認識に影響を与えた女性といえば『武器よさらば』のモデルとされるアグネス (Agnes) と，ヘミングウェイの最初の妻ハドレー (Hadley) ということになるが，共に彼よりも7，8才年上であったこともあり，自分の思い通りにはいかなかったであろうが，しかし特に彼女等がヘミングウェイとの関係において自己主張が強かったわけでもない。とすれば，彼にとって手剛い相手というのは漠然とにしろ母親であったと考えられる。何故なら，母親に対する彼の反感は父の自殺を契機にして次第に顕わになってくるからである。

「父と子」の中に更に別の箇所に父の自殺に関して述べているところがある。「すべての事情がすっかり解ってしまった今では，事態が悪化する以前のずっと昔のことを考えることさえ，いい思い出とはいいかねる。もしそのことを書いていたら，そんな不快さはまぬがれていたにちがいない。今までにもたびたび，彼は書くことによって，いろいろなものを身内から追放してきた。しかしそれはまだ時期が早すぎる。まださしさわりの

ある人がたくさんいる」(Now, knowing how it had all been, even remembering the earliest times before things had gone badly was not good remembering. If he wrote it he could get rid of it. He had gotten rid of many things by writing them. But it was still too early for that. There were still too many people. _pp. 407 - 408) と，ここで父の自殺の原因を把握したことをほのめかし，「最後の3年間はその顔はしっかりと型がきまってきた。それはそれで一篇のよき物語ではあるが，何しろそれを書くにはさしさわりのある人が多過ぎる」(It had modelled fast in the last three years. It was good story but there were still too many people alive for him to write it. _p. 408) として，父の自殺の物語はよき小説のねたになるとまで云う。父の顔は死ぬ前の3年間はっきりいわば死相を現わしていたのだ。「さしさわりのある人が多すぎる」としているのは，ヘミングウェイが非難の鋒先を向けたい者は母親の外にもいただろうが，その中心は母のグレイスである可能性が高い。なぜなら以後彼女を除いて外に父の自殺にかかわる「アメリカ女」はいないからである。

しかし母のグレイスが彼の云う「悪女」であったことが純客観的に衆目の一致するところであるかというといささか問題がある。その一例として，ヘミングウェイのきょうだいは母のことをどう思っていたであろうか。父のクレランスは例のフロリダの投資と自分の身体や精神の不安定の最中にあって，「ヘミングウェイは，父のニーズに答えようとしなかった母を非難しようとしたが，彼の姉妹たちは違っていた。彼女等は母はひどい状況の中で彼女のベストを尽くしているのに父の拒絶に困惑し，心を痛めているのだと信じた。この段階での彼女の熱狂的な行動のいくつかは彼の状態をたえず気づかう仮面であったが，どんな不吉な徴候にも希望をみるのが母の特徴であった」[30] とカートは述べ，更にクレランスの死後2年間母と一緒に家に住んでいた末妹のキャロル (Carol) は「母の悲しみは本物だった。アーネストが母は父が生きている間彼を愛しもしなかったし，真価を

認めもしなかったというのは間違った考え方だ」[31] と云っている。そして更に母にヘミングウェイより多く会う機会をもったキャロルは彼女が嘗ての初期の小説に戸惑い，いわゆる「不道徳云々」と云ったことは最早忘れたかの如く，如何に息子アーネストのことを誇りに思っているかをくりかえし語るのを聞いたのである。[32]

グレイスは多分「父と子」や「マコーマー」も読んだであろうが，その中のアメリカ女に対する誹謗が自分にも向けられていることを察知したかどうかはわからない。しかし彼女はそのことを意に介することは微塵もなく母としての情愛と威厳を保持し続けたように思われる。ヘミングウェイも又，父の死後は母や弟妹たちのために十分の金を送り，長男としての責任を果たしている。そして夫の死後アーネストからの送金などで彼女は絵筆と共に悠々自適の生活を送っていた。66才の時彼女に初めて会った或る女性は，「彼女が入って来た時はさながら女王の御来室のようだった……。彼女は雄弁に語り，時々抽象的な言葉も用いた。……熱意があたりに拡がり，私にとってはどこか天国からの見馴れない馬が私達のど真ん中に下り立ち，それに比して私達はみんな雀のような感じがした」[33] のである。

ヘミングウェイには虚構をつくりだす性格がある。それ故彼は作家となったのであろうが，実生活にもその虚構を構築する。「キリマンジャロ」や「マコーマー」で実生活から虚構を築き，その虚構の中で真実を語る技術に巧けていたわけだが，母親との虚構の世界での関係もそのことを考慮に入れる必要がある。彼が母親の葬儀に出席しなかったというのもヘミングウェイ伝説をつくりだす一つの要素かもしれないのである。母方の祖父ホール（Hall）がヘミングウェイが4，5才の頃母親のグレイスに云ったといわれる「この坊主はいつか人の噂になるだろうなあ。もしこの子が自分の想像力を正しい目的に使えば有名な人間になるだろうさ。だが，もっているちからのすべてをもって間違った道を歩み始めるなら，行き着く先は監獄だろうて」[34] はこの上なくヘミングウェイの一生を予言したものといえよう。

ヘミングウェイのこれらの女性に対する態度が何から来るのかは非常に興味ある問題であろう。その点については「父と子」の中の「父は甚だ神経過敏だった。それから又センチメンタルで，センチメンタルな人の例にもれず残酷でもあり，人から悪口をいわれもした」(. . . father was very nervous. Then, too, he was sentimental, and, like most sentimental people, he was both cruel and abused. _p.406) が示唆的に思えるのだが，それは更めて検討することにしたい。　　(1991)

(注)

1) Roger Whitlow : *Cassandra's Daughters,* (Greenwood Press, 1984) pp.68 - 69.

2) —what is *in* the story is this : a man, Harry, who is (and for a long time has been) weak, cowardly, dishonest and cruel ; and a woman who is strong, considerate, and deeply loving. (*Cassandra's Daughters,* p.70)

3) Ernest Hemingway ; *The First 49 Stories* (Jonathan Cape, 1964) 以下引用文末尾の頁は本書に依る。

4) Only Pauline Pfeiffer gave *The Torreents of Spring* unqualified approval.

Pauline's support had an efffect. Ernest dicided that she was a good literary critic and began to notice her with increased interest. (Bernice Kert : *Hemingway Women,* W.W. Norton & Company, 1983, p.170)

5) She was slender and well built, unlike Hadley, who had not lost weight gained during her pregnancy and who gave the settled appearance of approaching middle age, even though she was only thirty-four. (ibid., p.170)

6) Hadley was determined that Ernest should not go. They quarreled "dreadfully" and she refused to speak to him three days before he left. "He suffered, she said, "but finally went without a word from me." (Carlos Baker : *A Life Story,* p.97)

7) [Agnes herself, thirty years later, described] Ernest's words as friendly but restrained.(*Hemingway Women*, p.129)

8) [Ernest Later confessed to Bill Smith that] he was unfaithful to Hadley only once, during the fall of 1922 in Constantinople.(ibid., p.125)

9) *A Life Story*, p.146.

10) This time she received $2,308. from a long-forgotton childhood saving account. "It was Papa's idea to take the savings," she wrote. "Nobody to pay back and can bring along some more if you wish. Have no end of this filthy money. Just leave me know [If you wish me to bring more money] and don't get another woman, your loving Pauline. Poor Papa, rich papa." Pauline tried not to be the heavy-handed rich wife, and made jokes about money.(*Hemingway Women*, p.263)

11) ibid., p.264.

12) During the late 1930s, he used to cuckold Mother unmerccifully in Havana with an American lady friend—he screwed so many times that it's a wonder he had anything left Mother at all.Once he almost broke his toe jumping out of a hotel window when Mother arrived at the place unexpectefly.

Damn. All those wives. Mother got it right when she said, "I don't mind Ernest falling in love but why does he always have to marry t he girl when he does?"

He would feel himself beginning to stagnate after he had been married to one wife for a while. I think most men feel that way but it's more frightening for creative artists than most, because their very being depends on inspiration and they need new and stimulating experiences to fire their productive motors.(Gregory H. Hemingway: *PAPA A Personal Memoir*, Houghton Mifflin Company, 1976, pp.92 - 93)

II

13) *Cassandra's Daughters*, p.59.

14) . . . and still believe you will do something worthwhile. (Baker: *A Life Story*, p.180)

15) The murder thesis is wrong for three reasons: 1. it looks as though the charging buffalo will kill Francis in another two seconds anyway, making his murder superfluous and unnecessarily dangerous legally; 2. there is insufficient time for Margot to see that the buffalo was not dead and was charging, to size up the opportunity, and to carry out the technical acts of preparing and firing the Mannlicher; and, most important, 3. the text of the story says otherwise. (*Cassandra's Daughters*, p.66)

16) The final argument against Margot's being a murderess is found in the text itself. Hemingway's narrator, who has shown impeccable reliability throughout the story, says flatly, "Mrs. Macomber, in the car, had shot *at the buffalo* with the 6.5 Mannlicher. . . [my emphasis]" (p.36). *Not* "at Francis, while pretending to shoot at the buffalo," or " 'accidentally' shot her husband" (the unfathomable extrapolation of a number of critics) ——but plain and simply "had shot at the buffalo." Given the abundant evidence that two generations of critics have read those words and, by choosing to accept as accurate Robert Wilson's perceptions of Macomber's "manhood," Margot's "bitchhood," and the killing itself, have chosen not to believe them, one is forced to accept Robert Holland's judgment that "to an author like Hemingway , to whom the integrity of the word was a religion, the critcal fate of 'The Short Happy Life of Francis Macomber' must have been, if he knew of it, a sad example of scholarly ineptitude at best and of irresponsible thesis-hunting at worst." (ibid., p.68)

17) "I invented her complete with handles," . . . "from the worst bitch I knew (then) and when I first knew her she'd been lovely. Not my dish, not my pigeon, not my cup of tea, but lovely for what she was, and I was her all of the above, which is whatever you make of it." (*A Life Story*, p.284)

18) At twenty-two Jane was already a recognized beauty. She was of medium height, with a slender, well-proportioned body, exquisitely formed features, and blue eyes. (*Hemingway Women*, p.235)

19) In appearance, Margot Macomber with her perfect oval face and hair drawn back in a knot at the nape of her neck is without doubt modeled after Jane. (ibid., p.275)

20) ibid., p.235.

21) *A life Story,* p.284.

22) That same summer of 1935, . . .He wrote Jane Mason to come over and fish with him. He had not seen her or heard from her for many months— her explanation for not writing was that she had made a long trip to Africa during the winter. Some of Ernest's irritability of that winter may have been caused by their separation and the fact that she was interested in another man — Colonel Cooper, the Englishman who owend the house at Lake Manyara. (*Hemingway Women,* p.269)

23) "Why are you always so pleased when you're brave?" asked Pauline.

"I don't know," said Ernest. "I'm just always pleased."

"It's cute," Pauline said, "But it's sort of silly." (*A Life Story*, p. 263)

24) "She reminded me more than anything," Latimer recalled, "of Helen Hayes. She was not pretty, but winning, very bright. Her face was not beautiful, but so intelligent and alert that she became attractive." (*Hemingway Women,* p.293)

III

25) *Hemingway Women,* p.216.

26) Penguin, *To Have And Have Not.*

27) Colonel Patterson and the other European had a big quarrel but eventually made it up by shaking hands . . . When [Blyth] returned he was taken ill and was like one who was mad. We poured cold water on his head and he gradually got better. We think the lady must have been afraid of him because she went and slept in Colonel Patterson's tent. . . .

We saw the lady leave the sick man's tent and go to Colonel

Patterson's tent and she stayed there all night. In the morning. . . [she] went back to her husband's tent and directly she entered we heard a shot and the lady came running out and we ran to the tent and found that the European had shot himself in the mouth and the bullet had come out near his ear.... After the death of the European, Colonel Patterson and the lady occupied one tent. (Jeffery Meyers: *Hemingway,* Paladin, Grafton Books, 1987, p.270)

28). . . The life of an author provides the materials for his imagination, and his fiction is a way of imagining, not a version of his life or an extension of it. (Frank Scafella ed: *Hemingway: Essays of Reassessment,* Oxford University Press, 1991, p.167)

29) *Hemingway Women*, p.409.

30) Hemingway tended to blame Grace for not understanding his father's needs, but his sisters perceived otherwise. They believed that their mother did her best in a terrible situation and was puzzled and hurt by ED's rejection; some of her frenetic activity at this stage was a mask for the constant anxiety about his condition, but it was characteristic of her to read hopeful interpretations into even the most ominous signs. (ibid., p.213)

31) . . . her mother's grief was genuine, that Ernest was wrong-headed to insist that Grace did not love and appreciate her husband when he was alive. (ibid., p.231)

32) ibid., p.336.

33) "It was like royalty arriving, when she entered a room," . . . "She spoke eloquently, often in metaphysical terms. . . radiated such zest and enthusiasm that for me it was as if some exotic bird of paradise had flown into our midst and we were all brown sparrows by comparison." (ibid., p.323)

34) "Chumpy dear, this boy is going to be heard from some day. If he uses his imagination for good purposes, he'll be famous, but if he starts the wrong way, with all his energy, he'll end in jail. . . " (Marcelline Hemingway Sanford: *At The Hemingways,* An Atlantic Monthly Press, 1962, p.12)